

C.S.ルイスの三位一体論

—キリストの神性—

高橋 清隆

日本大学大学院総合社会情報研究科

C.S.Lewis's Trinity

—The Divinity of Jesus Christ—

TAKAHASHI Kiyotaka

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this paper is to demonstrate a core of C. S. Lewis's idea of Trinity through his view of the divinity of Jesus Christ. Even though Trinity is one of the most difficult Christian doctrines, C. S. Lewis, who is well known as a fantasy author as well as a Christian apologist, explained it well by means of a geometrical image.

First of all, I verify that the geometrical image will not only help us understand of the Trinity but also lead us close to God. Some people insist that Jesus was merely a great teacher of morals, therefore they doubt his divinity, but Lewis claims that Jesus is God, and it is based on at least three reasons. And secondly, I examine three reasons in detail and try to clarify Lewis's view of Jesus Christ's divinity so that we can understand Lewis's idea of Trinity

1.はじめに

本稿の目的は、キリストの神性に着目して、C.S.ルイス(Clive Staples Lewis,1898-1963)の三位一体論の一端を明示しようとするところにある。

まず、三位一体とは何かを提示すべきであろう。

天地の創造主である唯一無限の神が三つのペルソナ、すなわち聖父と聖子と聖霊とにおいて存在するということはキリストによって啓示されたキリスト教の基本真理である¹

これを敷衍すれば唯一の神に三つの位格、すなわち、父なる神、子なる神であるイエス・キリスト、聖霊があるという考え方である。キリスト者は唯一の神という本質を分離することなく、しかも、父、子、聖霊は三つの人格であることを認め、それぞれの位格を混同することなく、礼拝するということになろう²。三位一体という言葉は聖書の中には出てこないが、キリスト者はそれが神の啓示によって与えられたと言う。このことは三位一体が人知を超えたものであることを示しているものと思われる³。

¹ 小林珍雄編『キリスト教百科事典』エンデルレ書店、1960、p.691。三位一体の成立はキリストの神性と平行関係にあり、三位一体の歴史は、ニケア公会議においてキリストが神と同質であるとしたときに始まったとされる(郷義孝『キリスト教 21世紀への模索』学陽書房、2000、p.247)。カトリック教会においては、ニケア公会議とコンスタンティノーブル公会議の両りであるニケアコンスタンティノーブル信条を最も大切な信条と見なしている(『カトリック教会のカテキズム要約』カトリック中央協議会、2010、pp.55-56) ことか

ら、本論では、三位一体の定義をカトリック系統の事典から引用した。また、三位一体論の最も優れている組織理解の一つはカトリック神学者のK.ラーナーによるとしているプロテスタント学者もいる(郷義孝『キリスト教 21世紀への模索』、p.249)。

² ヘンリー・シーセン著、島田福安訳『組織神学』いのちのことば社聖書図書刊行会、1961、p.223。

³ 同上、p.222。

実際、三位一体論はキリスト教神学の中の特に難しい領域であるとキリスト者自身認めている⁴。しかし三位一体はキリスト教の基本教理であるので、キリスト者自身その難しい領域に敢えて挑む必要があると思われる。ルイスは次のように言う。

もしわたしたちの宗教が何か客観性のあるものなら、わたしたちはその中にある、人をまごつかせたり反撥させたりしそうな要素から目をそむけてはなりません。まだ知らずにいて、そして知らなければならぬものを匿しているものこそ、まさにその人をまごつかせるものであり反撥させたりするものでしょうから⁵。

キリスト教に客観性があり、だれもが納得できる宗教であるなら、難解な教理であっても包み隠さずわれわれの目の前に明示されるべきであろう。またルイスは難解なものほど、先に解決するという気質があるように思われる⁶。また、ルイスは難解なものに立ち向かってこそ、物事の進歩があることを認めている⁷。

さて、三位一体を理解する上で少なくとも二つの難解な問題に直面しなければならぬと思われる。一つは、三つの位格が唯一の神の中にあるという、人知を越えたといっても過言ではない三位一体の教理の説明、他の一つは、人間として存在した者が、つまりイエスであるが、神性を主張できるのか、という点である。ルイスは自身の著作である『キリスト教の精髄』などを通し、それらの問題から目をそむけず、正面から取り組み、われわれに明示しようとしているように思われる。本論ではルイスが難解な三位一体論をどのように説明しているのか、また、ルイスが説明するキリストの神性さを考察すること

により、ルイスが提示する三位一体論の一端に迫りたい。

2.ルイスによる三位一体の教義の説明

ルイスは難解な三位一体を、例えで説明しようとする。そしてその例えには大切な役割があると主張しているように思われる。まず、以下にルイスの三位一体に関する例えから見てみたい。

一次元しか使わなければ、われわれは直線しか描くことができない。二次元を用いれば図形、たとえば正方形を描くことができる。ところで、正方形は四本の直線から成っている。さらにもう一步進んで、三次元になると、われわれはいわゆる固体、たとえば立方体を作ることができる。立方体というのはサイコロや角砂糖のような形をしたもので、六つの方形からできている。お分かりいただけたでしょうか。一次元の世界は直線である。二次元の世界では、そこにもなお直線はあるが、多くの直線が集まって一つの図形を作り上げる。三次元の世界になると、そこにもなお図形はあるが、多くの図形が集まって一つの固体を作り上げる。言いかえるなら、より真実で複雑な段階に進むに従って、単純な段階において見出されたものが捨て去られて行くのではなく、それらのものはずっと存続しながら、しかも新しい方法で——もし私たちが単純な段階しか知らなかったら、とても想像できないような仕方——組合されて行くのである。さて、神に関するキリスト教の教説も、まさにこれと同じ原理を含んでいる⁸。

ルイスは六つの方形が一つの立方体を作るがごとく、神も三つの人格が一つの存在である、と言う。

ところで、三位一体という教義を説明するにあたり、比喻を用いているのはルイスだけではない。例えば、水蒸気、水、氷の分子構造は同じであるが、環境により、気体、液体、固体という三つの異なっ

⁴ A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、p.451。

⁵ C.S.ルイス著、西村徹訳『栄光の重み』新教出版、2004新装版、p.14。

⁶ C.S.ルイス著、西村徹訳『詩篇を考える』新教出版社、2008新装版、p.116。

⁷ ウォルター・フーパー著、山形和美監訳『C.S.ルイス文学案内事典』彩流社、1998、p.20。

⁸ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髄』新教出版社、2009改装版、p.249。

た存在様態を持つことになることや、富士山も見る位置によって違った様相を見せるなどの比喩が、三位一体を理解するのに役立つとしている⁹。教父たちも三位一体を、比喩を用いて説明しようとした。例えば、ニッサのグレゴリウスは、ペテロとヤコブとヨハネは三人の人間だが、三人が単一で共通の人間の本性に与っているとしても、三人の人間であるとしているが、一方で父・子・聖霊は単一の神性を持つといいながら、他方、我々は三人の神々について語っているのを否定することで、どうして我々の信仰を譲歩することになるだろうか、と言っている¹⁰。

では、これらの比喩は三位一体を説明する上で不可欠であり、比喩を用いれば三位一体を完全に把握することができるのだろうか。ルイスは、我々人間は神より低い次元に生きていますので、高い段階の神の領域は想像もつかない、または完全に理解することはできないことを認めている。とすると、想像することや理解することができないのであれば、ルイスが用いた例えは無意味なのだろうか。これに対し、ルイスは例えによって、わずかながらでも三位一体についての観念を持つことができ、そのような観念を得た時に初めて神について認識できるのではないかと言う。そして次のように主張する。

「われわれには三位格の存在を想像することができないとするなら、そのような存在について語っても意味がないのではないか」。その通りである。そのような存在について語っても意味はない。大切なのは、その三位一体的生命に現実に取り入れられることである¹¹。

確かに、三位一体は難解な教理である。しかし、それを比喩で説明するならば、不完全ながらも神を認識することの一助にはなるであろう。そして、そのことは、神に祈るという行動につながるかもしれ

ない。しかし神はキリスト者を引き入れるのである。つまりルイスは、神はキリスト者の祈りの対象であると同時に、キリスト者を祈りへと促す、と言うのである。その時、神の命はキリスト者に働き、それが、キリスト者にとって大切なこと、つまり、神に引き入れられることであると主張するのである¹²。

3.キリストの神性

ルイスはキリストの神性を、イエスが神から生まれた者である「神の子」であることと、イエスの地上での言動そのものに求めている箇所がある。それぞれ見てみたい。

3.1 神から生まれたもの

ルイスは、キリストは神から生まれた独り子であるが故にキリストの神性を主張する。

キリスト教信条の一つは、キリストは神の子にして、「造られしにあらず、生まれし」もの、と言ひ、さらに、「もろもろの世界より先に御父によりて生まれし」¹³もの、とつけ加えている¹⁴。

ルイスは、キリストはすべてのものに先立って神から生まれたものであると主張する。続いて以下のように言う。

現代英語ではBegettingとかbegottenとかいう言葉はあまり使われないが、その意味はだれで

¹² C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 改装版、p.252。

¹³ ニカイア信条。ニカイア公会議（AD325）において出された信条。厳密にはニカイア・コンスタンスチノポリス信条として知られている。イエスは神の本質によりより生まれた独り子であり、造られたのではない、と主張する。教父時代に使徒信条と共に権威あるものとして見られた。（A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、pp.44、46）。『コロサイ信徒への手紙』1章15節にはニカイア真情と類似する表現が見られる。新共同訳では「御子は、見えないう神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。」となっている。

¹⁴ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 改装版、p.243。

⁹ 井上洋二『キリスト教がよくわかる本』PHP 研究所、1989、pp.119-120。

¹⁰ A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、p.453。

¹¹ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 改装版、p.251。

も知っている。「ビゲット」するというのはだれかの父になるという意味である¹⁵。

そしてルイスは以下のように言明する。

神が生むものは神である——人間の生むものが人間であるのと同様に¹⁶。

ルイスは、*begetting* または、*begotten* という英単語がイエスに用いられていることを根拠として、イエスは神から生まれたが故に神であると主張するのである。では、ルイスの *beget* または *begotten* という英単語を基にした主張の根拠に正当性はあるのだろうか。以下、二つの点を通して考えてみたい。

①イエスに対して用いられる *begotten*

欽定訳聖書 (*King James Version*. 以下欽定訳。) の新約聖書には、”*begotten*”が 15 回出てくる¹⁷。そのうち、キリストに関して用いられているのは、『ヨハネによる福音書』1章14節、18節、3章16節、18節、『使徒言行録』13章33節、『ヘブライ人への手紙』1章5節、5章5節、『ヨハネ第一の手紙』4章9節、5章1節、18節、『ヨハネによる黙示録』1章5節の11箇所である。特に『ヨハネによる福音書』1章14節、18節、3章16節、18節においては、イエスのことを *only begotten Son* と呼び、イエスは神から生まれた者であることを強調している。しかし、イエスが神からではなく、ほかのものから生まれた場合にも *begotten* を用いている箇所がある。それは『ヨハネによる黙示録』1章5節である。欽定訳では以下のようなになる。

And from Jesus Christ, who is the faithful witness, and the first begotten of the dead, and the

prince of the kings of the earth. Unto him that love us, and washed us from our sins in his own blood,

the first begotten of the dead を直訳すれば「死人から初めて生まれたもの」となる¹⁸。死者から生まれたものが神になるのであろうか。この箇所では *begotten* と訳されているギリシャ語は *πρωτότοκος* である¹⁹。このギリシャ語単語は、「第一の」という意味の *πρωτός*²⁰ と、「産む」という意味の *τίκτω*²¹ から成り立っている²²。このギリシャ語単語は『コロサイ信徒への手紙』1章15節にも使われている。欽定訳では以下の通りである。

Who is the image of the invisible God, the firstborn of every creature:

この節では、*πρωτότοκος* を *first born* と訳している。先程も見たが、ニカイア信条には「もろもろの世界より先に御父によりて生まれしもの」と、この節と同じ内容のことが書かれており、ルイスはそれをキリストが神であることの根拠としている。しかし、欽定訳に拠れば、*firstborn of every creature* と訳されており、日本語に直訳すれば「全創造物の初子」となるであろう。もし、そう訳するのであれば、一番初めに神が創造したのはキリストである、という意味にもなりかねず、*begotten* という言葉により、イエスの神性を主張したルイスの考えと差異が生じる。同じ章の18節にも再び *πρωτότοκος* が使用されている。欽定訳では次の通りである。

And he is the head of the body, the church: who

¹⁸ 日本聖書協会口語訳聖書に拠ればヨハネの黙示録1章5節は「死人の中から最初に生まれたもの」と訳されている。

¹⁹ *THE COMPLETE KOINE-ENGLISH REFERENCE BIBLE New Testament, Septuagint & Strong Concordance* Kindle version による。

²⁰ 玉川直重著『新約聖書ギリシャ語辞典』キリスト教新聞社、2000、p.799。

²¹ 同上、p.901。

²² *THE COMPLETE KOINE-ENGLISH REFERENCE BIBLE New Testament, Septuagint & Strong Concordance* Kindle version による。

¹⁵ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 改装版、p.243。

¹⁶ 同上、p.244。

¹⁷ <http://www.kingjamesbibleonline.org/> の検索機能による。2014/04/18。実際には16箇所検出されたが、『ヘブライ人への手紙』1章16節は”*firstbegotten*”であったため、カウントしなかった。

is the beginning, the firstborn from the dead; that in all things he might have the preeminence.

この節で使用されている *πρωτότοκος* も *firstborn* と対応する。the *firstborn from the dead* は、新共同約に拠れば、「死者の中から最初に生まれたもの」である。この箇所は伝統的に *firstborn* を「生まれる」より「最初のもの、より先の者」という点に重点が置かれると解する方が良いという説がある²³。また、この節は *who is the beginning* と *he might have the preeminence* の間に挟まれている。新共同約では、前者は「最初の者」、後者は「第一の者」と訳している。ヘブライ詩には同一の事柄を、構文を変えずに言葉を違えて繰り返す対句法と呼ばれる表現方法がある²⁴。では、ギリシャ語で書かれている『コロサイ信徒への手紙』はヘブライ語となんらかの関係があるのだろうか。この書はギリシャ語を母語とするヘレニストであるパウロが書いたと信じられている反面、擬似パウロ書簡とも呼ばれ、パウロが書いたのかそうでないのか判断がつかないと言う者もいる²⁵。しかし、キリスト教はユダヤ教から派生したものであるので、キリスト者の多くはヘブライ詩の形式に通じていたと思われる²⁶。そのように考えるならば、伝統的に *firstborn* を「生まれる」より「最初のもの、より先の者」という点に重点が置かれると解するほうがよいのかもしれない。そうであれば、『ヨハネによる黙示録』1章5節の *πρωτότοκος* も「最初のもの、より先の者」という点に重きをおいて読んだほうがよいのかもしれない、という考え方も一理あることになる²⁷。

²³ 実際、「最初の者」に焦点が置かれ「生まれる」という観念はあまりないという聖書学者もいる。(岩隈直訳注『希和対訳脚注つき新約聖書 9 パウロ獄中書簡』山本書店、1975、p.46.)

²⁴ リーランド・ライケン著、山形和美監訳『聖書の文学』すぐ書房、1990、p.170。

²⁵ 田川建三著『書物としての新約聖書』勁草書房、1997、p.177。

²⁶ C.S.ルイス著、西村徹訳『詩篇を考える』新教出版社、2008 新装版、p.10。

²⁷ 日本聖書協会発行、舊新約聖書引照附、1975、新約聖書 p.503 には『ヨハネの黙示録』1章5節の「最先に

②人間も神から生まれる者

さて、神から生まれるのはイエスだけではなく、人間もそうであると、ヨハネ第一の手紙5章1節、18節に書かれている。ここも欽定訳から見てみたい。

Whosoever believeth that Jesus is the Christ is born of God: and every one that loveth him that begat loveth him also that is begotten of him (5:1)

We know that whosoever is born of God sinneth not; but he that is begotten of God keepeth himself, and that wicked one toucheth him out (5:18)

欽定訳に拠れば、両方の節とも、*born of God* を神から生まれた者(人間)に対して用いており、*begotten of him(God)* をイエスに対して用いている。*born* と *begotten* という異なる単語を用いることにより、人間とイエスの「生まれる」を区別しているように思われるが、ギリシャ語では、両方とも「産む」という意味の *γεννω*²⁸ を基にした単語が用いられ、「神から生まれた」という点に関しては、人間とイエスの間に区別は見られない²⁹。両方とも同じ語幹の単語が使われていることは、イエスと同様に、人間も神から生まれたが故に、神になるのであろうか。この点につき、ルイスは人間も神の子になる可能性について次のように述べる。

わたしたちは神から生まれたものではなく、ただ神によって造られたものにすぎない。われわれは、自然のままの状態においては、神の子ではなく、単なる(いわば)彫像にすぎない。われわれはゾーエー、つまり霊的生命を持たず、ただビオス、すなわちやがては衰弱して死ぬべ

生まれし者」の「最先」を『コロサイ人の手紙』1章18節を引照するように奨めている。

²⁸ 玉川直重著『新約聖書ギリシャ語辞典』キリスト教新聞社、2000、p.183。

²⁹ *THE COMPLETE KOINE-ENGLISH REFERENCE BIBLE New Testament, Septuagint & Strong Concordance* Kindle version による。

き生物学的生命を持っているにすぎないのである。さて、そこでキリスト教が提供しているものの全体は、こういうことになる。すなわち、われわれは、もし神がその御心のままに働くことを許すならば、キリストの生命にあずかる者となることができる。そして、その場合われわれは、造られたのではなく生まれた生命——これまでつねに存在してきたし、それからもつねに存在するはずの生命——を分かち持つことになる。キリストは神の子である。もしわれわれがこのような生命にあずかるならば、われわれも神の子であるはずだ³⁰。

われわれ人間はイエスが持っている父なる神と同じ種類の関係を持つことが可能になるとルイスは主張するのである。実際、旧約聖書に於いても、人間は「神の子」であるといわれているが、「神の子」とは広い意味があり「神に属する」と訳するのが一番よいと思われる³¹。新約聖書に於いては、パウロが「神の子」という言葉を用いるが、その場合、イエスとキリスト者との両方の関連においてである。しかしキリスト者が神の子になることと、イエスが神の子であることの間には明確な違いがある。『ヨハネによる福音書』およびヨハネ書簡は、「子 (huios)」という言葉を用いるが、信徒には一般的な言葉である「子 (tekna)」を用いている³²。これらのことはルイスのbegetに関する主張に正当性をもたらす証左となりうる。

3.2 イエスの地上での発言

まず、ルイスがイエスの発言をどのようなものとして捉えているのか見てみたい。

主は一冊の本をも書かれなかった。わたしたちは伝えられた言葉を知るのみであって、その多くは問いに対する答えとして、いくらかはそ

の文脈によって形をなす発言であった。また、わたしたちがそれをことごとく集めても、それを一つの体系には、まとめることのできるものではない。主は教えを説かれはするが、講義をなさるのではない。主が用いられるのは、逆説、諺、誇張法、喩え話、アイロニーであり、時に（けっして不敬のつもりはないが）「頓知」でさえある。主の発せられる金言は俚諺のように、もし厳密に受けとるならば、互いに矛盾するように見えることもある。主の教えは、だから、知性のみでは捉えることができないし「科学」の「勉強」のようなわけにはいかない。そういうやり方をしようとする、主ほどに捉えどころのない教師はいないことになるだろう。主は、ずばりとたずねた問いに、ずばりと答えることは、ほとんどなさらなかった。主は、こちらの気に入るように「つかまる」ことがないだろう。その試みは（またしても、決して不敬のつもりはないが）日光を瓶詰めしようとするのに似ている³³。

イエスの発言は捉えどころのないものであった、とルイスは言う。ルイスは、イエスが偉大な道德の教師であって神ではない、と言う主張に断固反対する。その理由は、人間がイエスと同じことを言おうものなら、狂人扱いされるだろうというものである。ルイスは、それ故に我々はイエスを狂人として唾棄すべき者にするのか、それとも神として崇拝すべき者なのか、選択する必要があると主張する³⁴。では、イエスは、どのようなことを言ったのであろうか。ルイスはそこにイエスの神性を見てとるのである。

ユダヤ人の中から突然ひとりの男が現われて、まるで自分が神でもあるかのような口ぶりでしゃべりながら、人びとの間を歩きまわり始めたのである。彼は、自分には人の罪を赦す権威があると主張し、自分は永遠の昔から存在して

³⁰ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 新装版、pp.270-271。

³¹ A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、p.482。

³² 同上、p.482。

³³ C.S.ルイス著、西村徹訳『詩篇を考える』新教出版社、2008 新装版、p.148。

³⁴ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009 改装版、pp.95-96。

いると言い、また、世の終わりにふたたび来て世界を裁くのだと言う³⁵。

ルイスはイエスの神性を(1)罪を許す権威がある主張したこと³⁶、(2)永遠の昔から存在すると主張したこと³⁷、(3)世を裁く権威があると主張したこと³⁸に求める。以下、それぞれを見てみたい。

①罪を許す権威があること

罪を許すことがイエスの神性とどのような関係があるのだろうか。ルイスは次のように言う。

イエスは人々に向かって、「なんじの罪は赦された」と言った。その人たちが罪を犯した相手の人間には一言も相談せずに、である。彼は、あたかも自分がすべての罪に最大のかかわりを持っているかのように、つまり、自分が最大の被害者であるかのようにふるまって、何のわだかまりも感じない。彼のこの態度が意味を持ちうるのは次の場合に限る——すなわち、彼がほんとうに神であって、人が罪を犯すたびに神の法則が破られ、神の愛が傷つけられる、という場合である。これに反して、もし神でない者の口からそのような言葉が出たとするなら、それは、わたしに言わせてもらえれば、歴史上類例のない最大のたわごとであり、最大の思いあがりであると言うほかにない。ところが(これが不思議な、そしてまた意味のあることなのだが)彼の敵たちでさえ、福音書を読んで、そこから「たわごと」とか「思いあがり」とかいった印象を受けることは、めったにないのである。偏見のない読者なら、なおさらそうである³⁹。

ルイスは、イエスがどんな罪をも許す、例えば、イエス自身が足を踏まれたのでも金を盗まれたのでもないのに、突然別の人の足を踏んだ者や、別の人の金を盗んだ者をその者に代わって赦すと宣言する場合、その宣言が意味をなすのは、イエスが本当に神であるからだと主張する。罪を許すことができるが故にイエスに神性が備わっているとの主張はアウグスティヌスにも見られる。アウグスティヌスによれば、人間は罪から逃れることから出来ない。人間自身の力では神との関係には入れないのである⁴⁰。従って、神との関係に入るためにはどうしても人間の内側の変化ではなく、人間以外の力から来なければならず、それは神から来るのである。

②永遠の昔から存在すること

では、イエスが永遠の昔から存在する故にイエスに神性が備わっていることに関して、ルイスはどのように主張するのだろうか。

「私は唯一の神から生まれ、アブラハムの前に存在した。私は在る(I am)」。しかし、「私は在る」という言葉がヘブライ語で何を表すかを忘れてはなりません。それは神の名であり、いかなる人間も語ってはならないもの、口に出せば死ぬものなのです⁴¹。

この箇所ではルイスは『ヨハネによる福音書』8章48-59節の出来事について語っていると思われる。ヘブライ語のYHWHは神の名を表すものであるが、その意味は「われはありてある者」である⁴²。このことは、イエス自身が、「私は在る(I am)」と言ったこと自体、イエス自ら自分はYHWHであると主張していることになる、つまりルイスが主張しているように、イエス自身が、自分が神の名を表す、または、そのような存在であると言ったという意見に一

³⁵ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髄』新教出版社、2009 改装版、p.93。

³⁶ 『マタイによる福音書』9章6節、『マルコによる福音書』2章10節、『ルカによる福音書』5章24節、『ルカによる福音書』7章47、48節。

³⁷ 『ヨハネに在る福音書』8章58節。

³⁸ 『ヨハネに在る福音書』5章22節。

³⁹ C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髄』新教出版社、2009 改装版、p.94。

⁴⁰ A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、p.52。

⁴¹ C.S.ルイス著、本多峰子訳『偉大なる奇跡』新教出版、1998、p.214。

⁴² 小林珍雄編『キリスト教百科事典』エンデルレ書店、1960、p.1735。

致するように思われるのである。しかし、ユダヤ教ではYHWHを口にするには穩当ではないと考えられていた。そこで、ヘブライ語ではadnai、ギリシャ語ではkyriosという代用語が用いられた。七十人訳のギリシャ語訳旧約聖書では、神の名を訳すのにkyriosという語が用いられている。ギリシャ語を話すユダヤ人はkyriosを、神を示す言葉として理解した。例えば、ユダヤ人はローマ皇帝をkyriosと呼ぶことを拒否したが、その理由は明らかに、その語が神にのみ用いられるべきであるという信仰の故であったと考えられる⁴³。しかし、新約聖書ではkyriosがイエスを指す語としても用いられている⁴⁴。新約聖書の書かれた背景にはイスラエルの厳格な一神教があり神の名を表すkyriosが神以外に使用されることは神聖冒瀆になるのにもかかわらず、イエスの弟子の一人であるトマスは復活したイエスに、「わたしの主、わたしの神よ」と呼びかけている⁴⁵。そしてルイスは次のように結論する。

自然のうちに折にふれて自らを頭わす畏るべき存在であると同時に、道徳律を人間に与える者——そのような存在自身であると——もしくはその子であると——あるいはそれと「一つである」と——自称する一人の人がユダヤ人の間に生まれたのです。この主張は人間に大きな衝撃を与えました。それは一つのパラドックス、忌むべき恐ろしい考えとさえ、見えます。わたしたちはそれをあまり真剣にとらない方がいいという気持ちに容易に誘われるかもしれませんが、真正面から受けとめた場合、それが人に与える衝撃ははなはだしいもので、この人物については二つの見解だけが可能となります。すなわち、彼はきわめていまわしいタイプの狂人であったか、もしくは彼自ら言明したとおりのもの——永遠にわたって——であったのです。どっちつかずなどということはありません。残さ

⁴³ A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、p.484。

⁴⁴ 『ローマ人への手紙』10章9節。

⁴⁵ A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館、2002、p.485。

れている記録からして、狂人であるという仮説が受け入れがたいとすれば、第二の仮説を受け入れるほかありません⁴⁶。

自分自身を、道徳律を与える、または、そのような存在自身であると自ら主張する者は、狂人か、永遠にわたって「われはありてある者」つまり、I amである者であるとルイスは言う。そしてイエスは狂人でなかった以上、神性を備えていたと結論するのである。この考えかたは他に類を見ないルイス独特のものであろう。

③世を裁く権威がある

人間の究極的な存在の根拠が神に依存するのであれば、人間が人間を裁くことは不当と言えるかもしれない⁴⁷。ルイスは詩篇19篇5、6節の「なんじのさばきは大きいなる淵のごとし」を引用し、神の裁きは淵であり、海のごとき神秘であると言う。司法において、人間が下す裁きは、神の裁きには及ばないのであろう。それ故に神の裁きが自然界の淵に例えられることは神性の壮麗なる象徴となり、多くの意味がある、と言う⁴⁸。このことは、裁きは神に属することの証左となろう。

さて、イエスは終わりの日に人々を裁くために再び来るので、常に目覚めていなければならない、と聖書は言う⁴⁹。ルイスもそのことを認めて、生徒はどこの訳を当てられるか分からないので、どこでも訳せるよう準備しておく必要があるがごとく、キリスト者もキリストの再来がいつか分からないので、常に準備しておく必要があると言う⁵⁰。しかし、なぜそのことがイエスの神性と関係があるのだろうか。

⁴⁶ C.S.ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』—改訂新版、新教出版社、2012、p.18。

⁴⁷ 郷義孝著『キリスト教21世紀への模索』学陽書房、2000、p.71。

⁴⁸ C.S.ルイス著、西村徹訳『詩篇を考える』新教出版社、2008新装版、p.106。

⁴⁹ 『マタイによる福音書』25章13節、『マルコによる福音書』13章35節、『ルカによる福音書』12章39、40節など。

⁵⁰ C.S.キルビー編、中村妙子訳『目覚めている精神の輝き—C.S.ルイスの言葉』新教出版社、1982、p.148。

ルイスは、常に準備をすることを、例えを用いて次のように言う。

女性はおりおり自然の光のもとで衣裳がどう見えるかを、人工の光によって判断しなくてはなりません、これはわたしたちすべてのかかえている問題と酷似しています。すなわちわたしたちの魂を現在のこの世界の電燈の光ではなく、きたるべき世界の昼の光に合わせてよそおわなければならないという問題です。よい衣裳とは、そのような光に堪えるよそおいです。その光こそ、朽ちない光なのですから⁵¹。

ルイスは来るべき世界のことについて言っているが、それはキリストの再臨のことであろう。その世界での光は、朽ちない光、永遠性をもった光であることを考えると、イエスの再臨も、もはや朽ちるものではなく永遠性を持ったもの、と考えることができると思われる。永遠という概念は時間の本源である神にあるという考えがある⁵²。このことは人を裁くために再来するイエスには神性が備わっていることの証左となると思われる。

4.おわりに

ルイスは三位一体を説明するに当たって比喻を用いた。その理由は、不完全ながらも神とは何かという深遠な問題を認識する一助となり、ひいては神に引き入れられることにつながると考えたからである。また、ルイスは、イエスが神性を備えていることを、イエスが神から生まれたものであることに求めた。イエスが神から生まれたが故に神であるという主張はルイスだけのものではない。しかし英語話者であるルイスは「生まれた」を意味する“beget”と言う単語を説明することによりイエスの神性を主張した。また、イエスの神性を、イエスの発言に求めた。イエスの発言は捉えどころがないことはルイスも認めている。しかしその中であって、明確にイエ

ス自身が神であることを述べている箇所があると主張する。本稿ではそのうちの三点、つまり、イエスが神から生まれたこと、罪を許す権威があること、世を裁く権威があることを考察した。ルイスはもし一般人がそのような発言をすれば狂人であると主張する。これもルイス独特のものと考えられる。確かに三位一体はキリスト教神学の中でも難解な教理である。しかしルイスはルイス自身のユニークな比喻や、独特の論法を用いて我々にそれを明示するのである。

(Received: May 31, 2014)

(Issued in internet Edition: July 1, 2014)

⁵¹ C.S.キルビー編、中村妙子訳『目覚めている精神の輝き C.S.ルイスの言葉』新教出版社、1982、p148。

⁵² 小林珍雄編『キリスト教百科事典』エンデルレ書店、1960、p.211。